

ひと言 コラム

新製焼 と 本業焼

新製焼

重要有形民俗文化財
染付山水図水指
19世紀前期



本業焼

重要有形民俗文化財
笹文石皿
18世紀後期
～19世紀前期



江戸時代の後期にはじまった磁器生産は、民吉の伝えた磁器製法によって急速に発展しました。こうした中、新しい仕事という意味で磁器は「新製焼」と称されました。
一方、これまで長きにわたってつくられ続けた陶器は、瀬戸本来の仕事という意味で「本業焼」と呼び分けるようになりました。

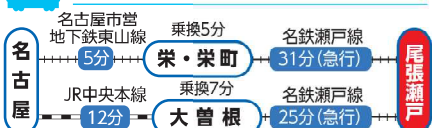
1000年以上の歴史を誇る せとものまち 陶都・瀬戸

愛知県瀬戸市は、名古屋市の北東約20kmに位置し、周囲を標高100～300mの小高い山々に囲まれ、気候も温暖なまちです。

良質で豊富な陶土に恵まれ、瀬戸市で焼かれるやきものは、「せともの」というやきものの代名詞として日本のみならず、世界の人々に知られるようになりました。先人たちは新しい技術や文化を柔軟に取り入れ、「せとものまち」を発展させてきました。

先人たちより引き継がれてきた「歴史」「伝統」「文化」、そして豊かな「自然」が、今もなお、瀬戸の暮らしに息づいています。

電車でお越しになる場合

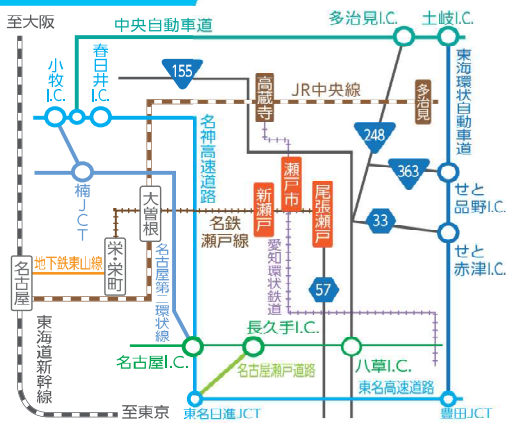


高蔵寺、岡崎方面からは愛知環状鉄道利用、瀬戸市駅下車、名鉄瀬戸線に乗り換えです。

お車でお越しになる場合

- 東海環状自動車道 せと赤津I.C.から(約10分)
- 東海環状自動車道 せと品野I.C.から(約15分)
- 名古屋瀬戸道路 長久手I.C. (東名高速道路日進JCT経由)から(約15分)

瀬戸市へのアクセス



問い合わせ先

瀬戸市文化課
TEL:0561-84-1093 FAX:0561-85-0415
〒489-0884 愛知県瀬戸市西沢町113-3
(瀬戸市文化センター内)

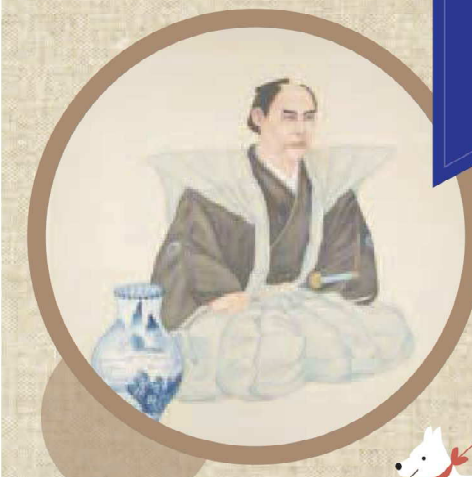


このガイドマップは、歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業(文化芸術振興費補助金)を受けて作成しています。

日本遺産のまち瀬戸市
瀬戸を知る
テーマ別ガイド②

のんびりくらし
せとマップ

磁祖ゆがりの地を 巡るコース



磁祖・加藤民吉の足跡 たみ きち



瀬戸の大松窯の窯元・加藤吉左衛門の次男として生まれた加藤民吉は、当時の瀬戸窯を保護する窯屋仲間の取り決めのために家業の窯業を継げずにいました。そして父・吉左衛門とともに、名古屋の熱田で新田開発に従事していたところを尾張藩熱田奉行、津金文左衛門の目に留まり、彼の研究していた南京焼なんきんやきと呼ばれるやきものの研究を手伝うこととなります。この南京焼こそ、いわゆる染付磁器のことでした。そして享和元(1801)年9月、ついに盃、小皿、箸立など小品ではあるものの染付磁器の製造に成功しました。しかし素地や釉薬など、まだ問題点は多く、肥前のような良質で高級な磁器を焼くことはできませんでした。

そのため、文化元(1804)年の早春、民吉は尾張藩や瀬戸の窯屋連中の支援の下、天草東向寺(曹洞宗)の天中和尚(愛知郡菱野村出身)を頼って、当時磁器生産の先進地であった九州へ単身修業の旅に出ます。そして苦労と努力の中で磁器素地の精製法、釉薬の調合法、丸窯による焼成法などを習得した民吉は文化4(1807)年に瀬戸に戻ってきました。

こうして民吉の帰郷によって伝えられた肥前磁器の製造法のおかげで、瀬戸の染付磁器は急速に進歩し、発展していきました。こうした業績をたたえ、民吉は瀬戸の「磁祖」として窯神社に祀られ、毎年9月の第2土・日曜日には「せともの祭」が開催されています。

民吉年表

安永元年 1772

尾張国瀬戸村吉左衛門の次男として生まれる。

享和元年 1801

父吉左衛門とともに熱田にて新田開発に従事する。染付磁器の試焼を行う。

文化元年 1804

九州へ修業の旅に出る。

文化4年 1807

瀬戸へ帰る。

文化5年 1808

一代限り苗字を許される。加藤民吉と名乗る。

文政7年 1824

52歳で没する。

文政9年 1826

加藤民吉を窯神遥拝所に合祀する。



加藤民吉像(窯神社内)

岐阜県に生まれ、日本芸術院会員・日展常任理事・日本彫塑会会長などを歴任した彫刻家である加藤顕清により昭和12年に制作されました。

民吉の九州ゆかりの地

加藤民吉は、文化元(1804)年2月に九州修業へ出発します。約1か月をかけて九州・天草に到着し、以後、天草・高浜の上田源作窯や三川内みかわりで修業し、最終的には佐々ささ市の瀬皿山(現:長崎県北松浦郡佐々町)の福本仁左衛門窯で修業し、磁器技法の習得に励みました。



佐々



市の瀬皿山窯跡(長崎県指定史跡)
民吉が約2年間修業した窯



佐々町遠景



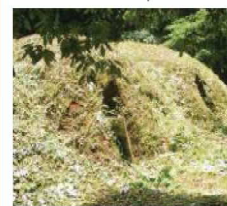
残心の杉

民吉が佐々を離れる時に植えたと言えられる

九州



天草



高浜皿山窯跡

民吉が九州で最初に修業した窯



東向寺

民吉の九州修業の拠点となった寺



いす
杵の木

1 磁祖加藤民吉出生之地

「パーティセと」の北側には、民吉の生家があったため、昭和12(1937)年に、尾張徳川家19代当主・徳川義親(よしかわ)により「磁祖加藤民吉出生之地」と書かれた石碑が建立されました。また、石碑の隣には磁器の釉薬に使われる杵の木が植えられています。

2 窯神社

民吉が祀られる神社で、社殿は登窯を象った形をしています。本神社の建立については、民吉が日ごろ信仰していた神々(秋葉山大権現・天満威徳天神・金毘羅大権現)を窯神として祀り遷すことを、文化9(1812)年に藩庁に願い出たことが始まりです。その12年後に民吉個人の遷す所として許可が下り、彼の窯場後方に建立されました。文政9(1826)年には、二代民吉が初代民吉を丸窯神(現在は窯神)と称して追記しました。



ざんしん すぎ 残心の杉

民吉が九州での修業を終え、文化4(1807)年に佐々を去る際に記念として杉を植えました。その杉は現在樹齢200年の大木となっています。この「残心の杉」は、平成16(2004)年に佐々の杉の枝を取り寄せ、挿木・育成し植樹されたものです。



いんすいし げん 飲水思源

民吉が九州での修業の際、身を寄せた東向寺のある本渡市(現:天草市)から贈られた天草陶石でつくられた碑。民吉が受けた恩を忘れてはならないことを今に伝えています。



つがねおみ 津金胤臣 父子頌徳碑

熱田奉行津金胤臣とその子胤貞の碑。胤臣は民吉の才能を見出し、胤貞は民吉を九州に送り出すために尽力しました。



磁祖 加藤民吉翁碑

大正11(1922)年に建立された、民吉の伝記が記された碑。1117文字の長文で、市内の碑の中では最長のものです。



かとうとう ざえもん 加藤唐左衛門 高景翁頌徳碑

庄屋として瀬戸の窯業の発展に貢献した人物。磁器製法の進歩を目指し、民吉の九州修業を支援しました。



3 瀬戸染付工芸館

江戸時代から代々続いた染付窯屋(古陶園)の細工場を復元した建物で、「瀬戸染付」をテーマとして、ロクロや絵付などの作業風景の公開や瀬戸染付の名品の展示などを行っています。この建物は平成13(2001)年に第8回愛知まちなみ建築賞を受賞しています。また、施設内には江戸時代末期から瀬戸で使われた「古窯」が保存されており、この古窯は昭和39(1964)年まで使用され、市内で唯一残されたもので、平成9(1997)年には瀬戸市指定文化財に、平成19(2007)年には近代化産業遺産群に認定されました。



瀬戸染付工芸館

開館時間 午前10時～午後5時
休館日 毎週火曜日(祝日の場合は翌平日)
年末年始
入館料 無料

染付体験

体験メニュー
はしおき200円、ブローチ300円、小皿500円など
受付 本館1階にて随時受け付けます。(午後4時まで)
※5名以上での体験は事前にご連絡ください。(0561-89-6001)
※作品は焼成後、後日お渡しします。(郵送料別途)

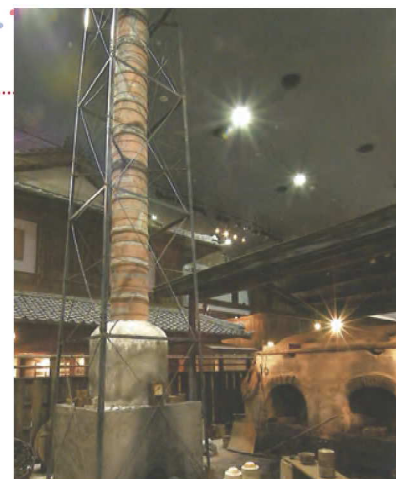
呉須という顔料で絵付をする「染付」が体験できます。

4 瀬戸蔵ミュージアム

瀬戸蔵ミュージアムは、瀬戸のやきものすべてがわかる必見の施設です。19世紀以降に登場する染付磁器の作品も多数見ることができ、中には民吉作と伝えられる優品や、万国博覧会で高い評価を受け、明治時代に数多く輸出された絢爛豪華な染付磁器なども数多く展示されています。

瀬戸蔵ミュージアム

開館時間 午前9時～午後6時(入館は午後5時30分まで)
休館日 月1回程度臨時休館、年末年始
入館料 一般500円、高校・大学生・65歳以上の方300円
中学生以下・障害者手帳をお持ちの方・妊婦の方は無料
※20名以上は団体割引あり



重要有形
民俗文化財



青磁染付
龍漣文大花瓶
伝加藤民吉
19世紀前期

瀬戸市
指定文化財



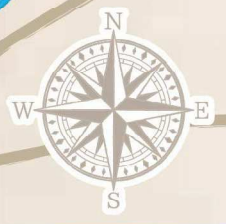
染付花鳥図
獅子鈕蓋付
大節壺
川本樹吉 初代
明治9(1876)年

磁祖ゆかりの地を巡るコース

P 駐車場 トイレ i インフォメーション

モデルコース

所要時間: 2~3時間



155

248

※磁祖が
はわ込まれています

瀬戸蔵
(2F 瀬戸蔵ミュージアム)

瀬戸染付
工芸館

窯神社

磁祖加藤民吉出生之地

瀬戸蔵

瀬戸染付
工芸館